

もうひとつの関ヶ原

細野 哲弘 みずほ銀行 顧問
(元 特許庁長官 資源エネルギー庁長官)

「日本・人口重心」というのをご存じだろうか？日本の人口分布の加重平均的な中心点のことである¹⁾。

それが現在、岐阜の美濃地区にある。……だからと言って美濃は日本の中心だ、或いは中心だったなどと云うつもりはない。ましてや統計のない昔の事情は想像の外である。

しかし、伊吹山系、鈴鹿山系を挟んで濃尾平野から近江、畿内を望む美濃の西部とりわけ関ヶ原付近は、古くから人とモノ、そして思惑が交錯する要所として重きをなしてきた。飛行機も大規模なトンネルもない時代にあって、狭隘な通り抜けの地であり冬は積雪が通行を阻む難所であったが、いやむしろそうした地勢、地政であるが故に、多くのドラマの舞台になってきた。そして、その最たるものが天下分け目の関ヶ原合戦である。

関ヶ原の合戦と云えば、その言葉に接するだけで関ときの声が聞こえてきそうな大スペクタクル。そして今に至るも、なお「もしも……がそうでなければ……歴史は別のモノになっていたはず」という我が国軍事・政治史上の最大級の出来事である²⁾。すでに多くの知見が色々な角度から研究、描写をしてきた主題であり、ここにはとても素人が出る幕はない。

でも、ここの地勢、地政に鑑みると、もっとほかにも「もしも……」という歴史の結節点になりうるような出来事つうがあってもおかしくない。その方面の通には自明のことであろうが、そこは素人歴史探偵の気楽さ



不破の関跡（関は789年に廃されたが、以後関守が置かれていた）

と身軽さをよいことに、これまで寡聞にして知ることのなかった地元に残る標しるべを辿っていくと……。

関ヶ原は中山道六十九次の58番目の宿場町で、同時に北国街道（北国脇往還）、伊勢街道への分岐点であり、古来より内陸交通の要衝であった。また、本州を東西に分ける区分点でもあった。この地に古代三関³⁾の一つである「不破の関」が設けられたのであるが、その創設は壬申の乱における戦略上の機微に由来する。

壬申の乱（672年）というのは、天智天皇崩御後の皇位継承争いである。当時、皇位は同母兄弟間の継承が慣例となっていたが、天智天皇がこれを無視して嫡子相続を匂わせる大友皇子（嫡男）への太政大臣任命を強行したため、同皇子と天智天皇おおあまのおうじの間に跡目を巡る内紛が生じたものとされている。天智天皇なかのおおえのおうじ（中大兄皇子）といえ、藤原（中臣）鎌足

1) 人口重心とは、日本列島をその山河の形状、質量を無視して一枚のプレートとみなし、全ての国民の体重が一定とした上で、どの点で支えたらプレートが均衡するかと云う意味でのバランス重心である。国勢調査による現代の人口重心は、首都圏への人口転入によって徐々に南南東に移動しつつあるが、2010年時点で岐阜県関市にある（5年前に比べて、南東に2.4km移動）。7世紀中頃以前の古代日本は、倭国（わのくに）というか大和（やまと）というかにかかわらず、その政権の範囲としては東北地方北部は領域に入らず、東北南部から中越・下越にかけた地域や九州南部も未掌握の辺境であった。仮に関東・北陸地方から九州北部までを当時の「日本」とすれば、当時の人口重心はかなり西に偏していた可能性が高い。

2) 関ヶ原の古戦場は以前からウォーランドとして史跡化されてきているが、来る2020年に合戦420周年を迎えるにあたり、岐阜県は古田肇知事の陣頭指揮のもと、改めてこの地の歴史跡としてのブラッシュアップ・ヴァージョンアップを図るべく各種の方策を検討中と聞いている。

3) 古代三関（さんかん）とは、不破の関の他、鈴鹿の関（伊勢）、愛発（あらかち）の関（越前）をいい、平安京以降は愛発に代わって逢坂の関（近江）が加わった。



とともに大化の改新の立役者であり、古い豪族政治を刷新して律令国家建設に向けた新しい政治勢力を確立したことになる。しかし、当時の政治情勢はそれほどナイーブなものではなく、政権は多くの不安材料を抱えていた。というのも、蘇我蝦夷・入鹿父子を討ったあとも豪族間の勢力バランスは微妙であった。それに百濟滅亡、白村江の敗戦の余波で玄界灘や瀬戸内に国防施設を強化せざるを得ず、また百濟難民の収容、近江宮の造成などにより、豪族、民衆には不満の種になるような多大な負担がのしかかっていた。ただ、その事情に深入りすることは、ここでの趣旨ではない⁴⁾。

両皇子の戦いは、近江息長の横河の戦いを皮切りにして、最終的には瀬田橋の戦いで決着がつくのであるが、実は乱の雌雄を決したのは関ヶ原地区の地勢であり、それを制した大海人皇子側の機略そのものであった。

大海人皇子は一旦は皇位継承を持ちかけられたが、これを断ったとの説がある。しかし、その真否にかかわらず、政局の流れが大友皇子に傾いている情勢とそれ故に我が身に迫る危険は自ずから明らかであったであろう。同皇子は吉野に逃れて出家・隠棲。早速に拳兵の準備をしたともされているが、恐らく意に任せなかつただろうと思われる。確かに、上記のように豪族、民衆の間には政権への不満が高まり、政権内でも天智治世の唐風の政治趣向に対しては所謂守旧派からの抵抗・違和感があったのは間違いない。しかし、中央の太政大臣たる大友皇子に対し、大海人皇子は所詮は「下野」の身。同皇子を観る地域の有力者の視線、思惑には厳しいものがあつた。事実、天

智天皇崩御ののち、大友皇子側の不穏な動き⁵⁾に対抗し意を決して「旗揚げ」するも、当初大海人皇子に与する者は少なかった。

転機は美濃への進出とともに訪れた。もともと美濃の湯沐邑（現在の安八郡辺り）には大海人皇子の私領があつた。大海人皇子はここを守る多品治⁶⁾のもとに村国男依らを派遣し、安八磨郡（今の池田町付近）での兵の徴発を図った。彼らは見事に任務を果たし、美濃の兵三千でいち早く「不破道」を塞ぐことに成功した。大友皇子側も決戦のために東西の有力者に使者を送って加勢の工作を行ったが、不破道の封鎖により、東国からの兵力動員を命じる大友皇子側からの使者はその通行が阻まれることとなった。

この「先を制した位取り」による寸断効果は絶大で、これによって戦いの帰趨は決したといつてよい。西国（吉備、筑紫）での動員が不調に終わった大友皇子側に対し、伊勢の郡司の協力⁷⁾を取り付け、尾張、信濃からの兵も糾合して不破郡家に入り、野上行宮⁸⁾（関ヶ原町）に堂々の本陣を構えた大海人皇子側の勢いと差は歴然となり、あとは瀬田橋まで雪崩を打つ展開となった。



野上行宮跡

- 4) 気安く筆を染めてみた壬申の乱であるが、その背景たるや関ヶ原の合戦よりも遙かに謎の多い事件である。大化の改新（乙巳の変）から天武・持統天皇の治世に至るあたりの古代史には、朝鮮半島、中国、九州との政治的往来や皇位系統に纏わる実に多くの説があり、昔学校で習った「定説」とは全く違う世界があつたかもしれない。況や、額田王（ぬかだのおおきみ）を巡る恋のさや当ても両皇子の争いの原因の一つとする説の真否に至っては、とても筆者の手に負えるものではない。
- 5) いつの世も戦闘において「どちらが先に仕掛けたか」は微妙な問題である。ここでは、天智天皇の陵墓（みささぎ）を作ると称して中央の指示で美濃・尾張で人足の徴発が行われたが、それらが武装しているとの情報に接した大海人皇子側が、やむなく反応したとの日本書記の説明に沿って記述した。
- 6) 当時各地に皇子の生計を支えるために設けられた一種の封戸である邑が置かれていて、湯浴邑もその一つ。多品治（おおのほむじ）はその現地管理者（湯沐令）であった。不破道閉鎖のあと、これに繋がる伊賀の荊萩野（たらの）に出て大友皇子軍の将、田辺小隅を撃退するなど殊勲甲であった。古事記編纂の太安万侶（おおのやすまろ）の父とする説がある。なお、近くには金生山（かなぶやま）があり、のちに二億五千年前の古代生物の化石を産することで世界的に有名になったが、当時は鉄鉱石を産し、武具の製作にも使用されたといわれている。
- 7) 大海人皇子が吉野から美濃に向かう途中、伊勢の迹太川（とおかわ・現在の朝明川）の畔で天照大神を祀る伊勢神宮を遙拝したとの記事が日本書記にある。天武天皇、持統天皇以降伊勢神宮と天皇家の関係が密接になったと云う事実はあるが、ただ当時伊勢神宮は伊勢大神を祀っていたとされ、時代縁起の前後を入れ替えた創作の印象がある。
- 8) 野上行宮はもともと尾張の大隅一族が持っていた私邸の跡地を仮の宮にしたもの。当時尾張と美濃の有力者が相互に関係を持っていた証左と思われる。



大海人皇子兜掛石(近くに沓を脱いだ折に足をかけた沓脱石なるものもある)



井上神社



若宮八幡神社

この地には、今も当時を偲ばせる沢山の史跡がある。玉倉部^{たまぐらべむら}の戦いでは、大友軍が奇襲をかけて激戦となった。両軍兵士の流血で川底の石が黒く染まったという黒血川(もとは山中川と云った)や、大海人皇子が兵を励ますために桃を配ったといわれる桃配山⁹⁾、大海人皇子が兜を掛けたといわれる兜掛石などを今も見ることができる。また、両軍が対峙した藤古川の両岸には、夫々東に天武天皇を祀った井上神社が、西には弘文天皇(大友皇子の諡号)を祀った若宮八幡神社がある。さらに、若宮八幡神社の少し北、黒血川を越えた先の裏山のような処に自害峯の三本杉がある。大津^{なごらやま}の長等山で自害、最期を迎えられた大友皇子の首級は、村国男依^{あらた}によって野上行宮まで運ばれて、大海人皇子による検めののちこの地に埋葬されたという。

乱が治まったのち天武天皇として即位した大海人皇子は、この地の戦略性を重くみて東国支配の要衝として不破の関を設けた。さきに「不破道」と云ったが、当時はその地に明白な名前はなく、関所が出来てから命名されたというのが経緯^{いきさつ}である。なお、美濃の国の国府(国分寺)は随分と西に偏ったところ(現在の垂井町)にあるのだが、これも不破の関の位置との行政上の便宜と云われている。

以上が天下分け目のもうひとつの関ヶ原である。そして、以下余談なるも、筆者にとってのもうひとつの関ヶ原の話題を付記して本稿の括りとしたい。

関ヶ原から南に下った国境^{くにざかい}に近いあたりに、今須という古い宿場町がある。中山道にある美濃側の宿場町としては最後のもので、その先は近江である。美濃16宿あるうち当時の佇まいを残している唯一の宿である。いまもその一里塚^{とさきわじぞう}が残っている。実はその手前の常磐地藏^{とさきわじぞう}¹⁰⁾から東海道線に沿って西に歩いていたら、線路脇で青坂神社なる古びた社^{やしろ}に出喰わした。



自害峰の三本杉(地元では、弘文天皇御陵候補地とされている)



今須宿の一里塚



青坂神社

9) 桃配山は、関ヶ原の合戦においても徳川家康が一時ここに陣を敷き、壬申の乱の故事にならって、味方に桃を配ったとされる。

10) 常磐御前は源義経の母である。義経が奥州に逃れたと聞いてあとを追うが、途中この地で落命。此れを憐れんだ地元の人々が地藏を祀った。



隣接の妙應寺で戴いた由縁書によれば、神社の開祖は長江秀景と云う源頼朝の家臣であるとのこと。なんでも、承久の変(1221年)の後、北条氏と頼朝恩顧の旧臣との間に微妙な関係が生じ、もともと相模国三浦郡長江村の住人であった長江氏がこの地に移って来たのが起源である。北条氏との確執を避けるならばもっと遠くでもよかったかもしれないが、関ヶ原、今須はいわば当時の武家勢力圏たる「東国」の最西端であったのではなかろうか。

長江秀景はこの地に居を構え、青坂神社に祀ったのが、なんと先祖の鎌倉権五郎景政！長江氏は権五郎景政の父の代に鎌倉を領したため、その時期「鎌倉」を名乗った。美濃に移った長江秀景は権五郎景政の4代末裔に当たる。

牽強付会を覚悟で云うと、筆者は歳を重ねてから嗜むようになった絵画の題材を、ままた歌舞伎に求めることがあり、以前描いた歌舞伎十八番「暫」のスター鎌



「鎌倉権五郎見参」の絵と筆者近影

倉権五郎とはこの人物のことである¹¹⁾。その絵を描いた頃には、題材と地元との関係など思いもよらずにいたが、妙應寺の宝物殿で権五郎の武勇にまつわる矢¹²⁾を見つけた折には思わず息をのんだ。また、その由来を知って、神社の細くて急な石段を上った先の祠のような古い佇まいを初めて前にした時、妙に懐かしく不思議な気持ちになったものである。



鎌倉権五郎景政肉附箭の表記がある箱と矢(妙應寺資料より)

これまで地元美濃について三話をなすに当たって、あちらこちら現地を歩いてみた。そうしたところ、それぞれの主題とは別に付随的に色々なことが分かってきた。「犬も歩けば棒に当たる」¹³⁾と云うが、まさに赴く先々で色々な意外な事実、こぼれ話に遭遇した。そのたびに気持ちがほっこりと温かく膨らむ思いがして、思わず知らず自分自身の「心の重心」が郷里にあったことを実感させられた。

そんな流れで、これまで本誌編集者のご厚意に甘えてへぼな素人記事を書かせて戴いてきたが、いかに「閑話休題」的な記事とはいえ、オール日本の専門誌にいつまでも特定地域にまつわる話題ばかり載せて戴くことには憚りがある。このシリーズは本稿をもって一区切りとさせて戴くことにしました。ご愛読(ご辛抱?) ありがとうございます。

- 11) 「暫」はご存じ市川宗家の荒事歌舞伎の代表作。派手な様式美で人気だが、筋立ては至って単純。鎌倉鶴岡八幡宮で、天下覆滅を狙う悪業公家(清原武衝)が無体にも善良な民を切り殺そうとしているところに、「しばらく、しばらく」と云って鎌倉権五郎と云うスーパースターが登場しこれを助けるといふもの。以前は登場人物に名前はなく、1895年に九代目の市川団十郎によって再構成された折に善玉、悪玉ともに命名がされ、善玉主人公に後三年の役などで活躍した実在の鎌倉権五郎の名前を借用した。よって、歌舞伎の筋とここでの実在人物像とは実態の関係はない。因みに、対する清原武衝は奥州の武士。後三年の役で源義家に敵対したためか悪玉の冠名に名前を使われてしまったが、悪業の士であったとの記録はない。なお、鎌倉権五郎の歌舞伎舞台衣装には大きな弁(ます)が描かれているが、これは当地の今須(います)の読みと関係するのではないかとの説があると妙應寺の住職からうかがった。
- 12) 妙應寺は長江秀景の苗裔重景(しげかげ)がその母妙應の菩提を弔うため1360年に開いたもので、美濃最古の曹洞宗寺院。その宝物殿に「鎌倉権五郎景政肉附箭」なる矢が残されている。後三年の役折、鎌倉権五郎景政は眼を矢で射られるも構わず奮戦し、帰還後に仰向けに倒れたとされる。三浦為次が刺さった矢を抜かんと景政の顔に足をかけたところ、景政は此れを無礼として為次に斬りかかった。為次はその剛勇を愛でて膝を屈し、改めて膝で顔を抑えて矢を抜いたと云われており、その時の矢とされるものが此れである。
- 13) 「犬も歩けば棒に当たる」とは、元々は余計なことをすると弊害を生ずるといふあまり良くない意味だが、最近は積極性を奨励する意味にも使う場合がでてきた。第二話以降本話(第四話)までは、いずれも第一話以降、一話また一話と取材を進める途中で遭遇した美濃のこぼれ話を、「棒に当たる」を幸いモチーフ化して綴ったものである。(本誌第265号「高須輪中の縁」、第274号「墨俣の一夜城」、第278号「美濃の交代寄合衆」を参照。) 関ヶ原については、この地を美濃シリーズ掉尾のテーマにすることになるとうの予感当初からあった。さすがに1600年の合戦は有名すぎて「手に負えなかった」が、このシリーズの「こぼれ話」的趣旨に沿うものとしては、壬申の乱の秘話のほかにも、この地の地政にまつわる物語がいくつかある。幕末には尊王攘夷に燃える水戸天狗党の一派が水戸徳川斉昭の子で当時禁裏守衛総督であった一橋慶喜を頼って京都を目指した。しかし、関ヶ原一帯を固めた幕府討伐軍のせいで揖斐から先に西進を阻まれ、止むをえず北上して越前大野に迂回したものの遂に上洛を果たせず、その後の運命が暗転したことなど、この地ならではの史実が人口に膾炙しないまま、あまた埋もれている。